
FortePiano

無無無

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F o r t e P i a n o

【Nコード】

N 4 8 1 9 B A

【作者名】

無無無

【あらすじ】

少年がいました。彼は天涯孤独の身でした。親はおりませんでした。代わりにホームレスのおじさんがおりました。おじさんはホームレス狩りに殺されました。そして少年は――。突如全世界の人間に起こった進化ともいえる変異。その可能性の一つ、超能力。そんな、超能力がありふれた世界における物語。初投稿です。みなさんが某猫型ロボットのような温かい眼で見守ってくださると幸いです。

prologue (前書き)

どうしてこうなった。

いや、小説を書くと言うのは、本当に難しいものですね。他の作者様が毎日投稿しているのを見て、本当に感心します。私にそんな気概は生まれてこなんだ……。

冒頭のどうしてこうなった、は、多分初めて小説を書く方ならだれでも感じるだろう(勘)、思い描いていた物語と、自分の語彙能力の低さによる表現の薄さ。

思わず笑いましたよ。くふふ、と。

さあ、それでもいいという方は、どうぞこのまま。

無理、無理ですう！ という方は、このまま下に逝って目次で戻ってください。

え？ 誘導？

なんのことでしょう？ 私にはさっぱり分からず

では、ゆっくり読んでいってね！

prologue

クリスマスのサンタを信じている人間がこの世界にあとどれくらいいるだろうか。最近では小学生になる以前から信じていない子供もいるらしい。本当にサンタはいるのだが。

そんな中、高校生になっても信じ続けている十六歳男児がいた。というか、本当にいるのだが。

その少年は、一人身。両親の顔は見たことがない。兄弟すらいない。親戚すら誰も知らない。天涯孤独の身。というより、育てられたのがホームレスのおじさんで、気付けばそのおじさんのことを父親だと思っていて、本当は違って、しかし優しい男性で、だけどホームレス狩りで殺されて、七歳の時に孤児院に入った。

他の人間と違うのは、それだけ。たったのそれだけだった。

「今年はサンタ、来るかな」

十年間。ホームレスのおじさんが死んでから、一度も。そんな彼が今年のサンタに願ったことは、少しだけ切なくて少しだけ贅沢なお願い事だった。

「まあ、無理だろうな、いくらサンタでも」

信じていると言っても、ほとんど無理矢理。信じているのか信じていないのか、あやふやな状態だった。

十年間同じ願い事。

はつきり言って、サンタに頼むものではない。

「『家族をください』なんて、どこの阿呆が頼むんだよ……あ、僕か」

|| ||

|| ||

「あみや ついま
雨宮終真。『能力検査』。

CASE・PI

TYPE・雷撃使い
エレクトロユーザー

RANK・B

只今より、『能力検査』を開始します」

アビリティテスト

ビーツ！ というけたたましい音とともに、優男というふうな印象を受ける少年が視界の隅より飛来した円盤状の物体に向けて腕を伸ばした。

少しだけ力んだ素振りを見せた次の瞬間、少年の手の平から青い光を放つ雷が円盤状の物体に放たれた。

いかすち

雷が直撃した円盤状の物体は黒い煙を上げ破裂する。

「RANK・Eクリア。続いて、RANK・D。開始」

スタート

女性の平坦な声の後に、今度は四枚の円盤状の物体が四方八方から少年の視界へと入って来た。

しかし少年は、今度は両手を使って瞬時に撃ち落とす。

その次は十六枚。その次は四十枚。そこまでは本当に擦れ擦れのところでクリアできた。

だが、次の試行では、百枚の円盤状の物体が飛来したところで、少年はかなりの数を撃ち漏らし、「終了」という平坦な女性の声が響く。

「あみや ついま
雨宮終真。『能力検査』。

アビリティテスト

CASE・PI
エレクトロユーザー
TYPE・雷撃使い

RANK・B

アビリティテスト

これで『能力検査』を終わります」

「……ふー、お疲れさまでしたっつと」

少年、雨宮終真は額に滲んだ汗を拭いながら、律儀にも礼をした。少し癖のある髪が冷たい風にふわりと踊った。そんな彼に、横から近づいてくる影がある。

「終真ー。今回はどうだったよ？」

「前と変わらず、B判定だよ」

「普通だな」

「普通ですよどっせ。そんな江崎智也くんはどんな判定だったのだからございましょうね」

「……B」

「普通だな」

「普通で悪かったな！」

アビリティテスト

『能力検査』は、全世界の人間が一年に一回は試験しなければならぬ、国が定めた体力測定のようなものだ。受けなかった場合は、少なからず罰金を科せられ、強制的に受けさせられる。検査自体は無料で、あくまでも国が行っていることだ。

そんな中、学生は年に三回。学期ごとに受けるのが通例となっている。その中の学生の二人が、終真と智也だった。

終真と智也の付き合いは、はつきりいつてかなり長いものになる。幼い時期、というものがいつまでなのかは明確には分らないが、言ってみれば幼馴染だろう。小学校一年からなにかと気が合う友達いや、親友なのだろう。

「終真。ほれ、あそこ見ろよ」
「どれどれ」

智也が指さした先には、この学校のエース。たしか、冬月^{ふゆつき}^{ごだい}
という生徒が、今まさに『^{アビリティテスト}能力検査』を受けていた。

能力のタイプは、^{エアロマスター}風力操作。オーソドックスな能力ではあるが、
彼、冬月^{ふゆつき}^{ごだい}が使用する風は、そこら辺の学生が使うそれとは一線
を画していた。

だが、注目すべき点はそこではない。

冴大の周りに群がる女子生徒の山である。

「……なあ、終真」

「なんだよ、智也」

「俺たちって、泣いてもいいと思うぜ」

「泣けよ。ちなみに僕の胸は貸さねえ」

ルックスは、茶髪でそれがよく映える面長の綺麗な卵型な顔。すらり
りと伸びた体軀は細いが、決して頼りなさを覚えるものではなかつた。
むしろ、筋骨隆々とした筋肉共よりも迫力に満ちている。それでいて、人
当たりがいい。

女子にモテる条件の参考書が、二人の憐れな少年の前に居た。

「格好良くて頭が良くて——その上、能力のランクもあつちが絶対
的に上。勝てる要素が一つも見当たらない」

「能力値で負けてても、その他で一つでも勝っている部分があったら
救われただけだな」

人間に訪れた、一つの進化。

その中の具体的名称は、昔の人間がよく懂れ、テレビ番組ではも
てはやされ本には登場し多くのベストセラーを生み出した、一つの

要素。

超能力、という、一つの進化だった。

始まりは、一人の少年に起こった悲劇。それに伴う、人間の遺伝子に起こった変異。

ウルトラヒーロマン
特異性能力者と科学的に定義されているが、一般呼称は超能力者。ヒトという生物の枠組みは、果てしない未知へと広がった。

それが、この世界の人間という存在。二十二世紀を越えた未来の、現在である。

「冴大のランクは、どのくらいだったっけかな？」

「S。多分、すっげえモテる、のインシヤルだ」

そんな能力者の枠組みの中でも、列記とした格差が存在する。

RANK・EからRANK・SSSまでの八段階評価で、その人間の能力強度が表記される。

RANK・EとRANK・SSSの同じ能力を使う人間が相対すれば、奇跡が起っても勝てる見込みは京けいに一ほどしかない。だが、能力者同士の決闘は国の法律によって制限されている。それはもちろん、超能力者の出現による人々の犯罪の増加、およびそれに伴う死傷者の激増が原因である。誰しも、手に入れた力は振るわなければならない。

智也はムカムカして歪んだ顔で、「うがうが」と呻っていた。

「二人がかりでフクロにすっか」

「超能力行使制限法、対人に攻撃性のある能力を行使した場合、厳重な処罰を与える。ただし、防衛に関してはその限りではない。誰でも知ってる常識。っていうか、こんなこと知らなくてもSランクの奴に喧嘩売る馬鹿なんていないだろ」

「ここにいるだろ？ つういーまくうん？」

「あれ、おかしいな。さっきまでここにいたはずの智也くんが消失

してしまったではないか。お得意の瞬間移動でも使ったのかな？

ならば、さつき智也くんが喧嘩売ってたよって、冴大くんに知らせなくちゃなー」

「お前は鬼か！ 俺の存在感もろとも実体の俺含めてこの現世から消そうとしやがった！」

「失礼な。鬼神と呼んでくれたまえよ」

「格が上がったッ！？」

これが男子高校生で、さっきまでの話題がいきなり変わるなんてことは日常茶飯事である。

そこで終真が、少し訝しげな表情で目を細める。

「今日はやけに噛みつくな、智也。昨日までは、『ハン、イケメン爆発しろ』程度だったのに。それに智也、お前は彼女がいるじゃないか」

「……………終真。お前は人の傷口を抉る天賦の才があるよ」

「……………まさか」

智也は先程までの怒りに顔を紅く染めた表情とはうって変わり、急にになかを悟ったかのような表情になった。フツ、と溜め息を漏らしながら、軽く膝を抱えた。

「お前の想像を超えるぜ、終真。本当、自殺した人間の気持ちがよく分かる」

なんだかおちゃらける場面でもないようなので、終真は下視方向斜め四十五度ほどに視線を向け、そっと耳を向けた。もちろん、笑いを堪えながら。

だが、次に智也が口にした言葉は、終真の想像を遥かに超えるものだった。

「……別れた。そして彼女は今あの群れの中に居る」
「……………」

言葉を出すのも躊躇われる。本当に、なんて不幸な男なのだろう。よもや、嫌っている男に寝とられてしまうなんて、それはそれは辛いだろう。まあ、冴大が手を出したのではなく、単純に彼女の方が冴大に走ったのだろうか。

終真と智也は、二人して膝を抱えたまま、魂の抜けるような溜め息を漏らした。

prologue (後書き)

ご感想だとかくださると、非常に作者のテンションは上がると思います??

稚拙な文を読んでくださってありがとうございます。

次回もまた、この小説に目を通していただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4819ba/>

FortePiano

2012年1月13日02時48分発行